



14:1 ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。

14:2 そこには、イエスの真正面に、水腫をわずらっている人がいた。

14:3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。」と言われた。

14:4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて直してやり、そしてお帰りになった。

14:5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるでしょうか。」

14:6 彼らは答えることができなかった。

14:7 招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。

14:8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、

14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。

14:10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになりませう。

14:11 なぜなら、だれでも自分を高くする者

は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

14:12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。

14:13 祝宴を催すばあいには、むしろ、貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たちを招きなさい。

14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」

安息日にイエス様がいやしを行うなら、批判の口実になると、彼らは待ち構えていました。自分の義を主張する人々にとっては、水腫をわずらう人は都合のよい餌としか思えなかったのでしょうか。しかしイエス様は彼を「抱いて直してやり」ました。何という愛でしょうか。単に体をいやすだけではなく、愛で包み込んで心までもいやされたのです。

私たちに対するイエス様の愛もこれと同じです。また主の安息日はこのようなものです。形式を守るのではなく、また主から離れて自分の都合を第一にするのではなく、イエス様の愛のわざを現実 にいただけるのです。

そのような価値観は神の国のものです。自分の都合や正当化を考えないで、ただ主のみこころのみを求めるといことです。もしかしたらそのような生き方、また日曜日は不安でしょうか。イエス様は自分で自分を満たそうとするのではなく、主によって満たしていただきなさいと言われます。すなわち、上席などの権威やお返しなどの利得を求めるとは、主からそれらをいただきなさいということなのです。

その神の国の価値観の原点が安息日（日曜日）の礼拝にあるのです。そのような命ある礼拝をささげましょう。また安息日に表わされるイエス様の愛に抱かれつつ、安心と希望で生きましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

